

氏名(本籍)	庄 <small>しょう</small> 司 <small>じ</small> 他人 <small>たに</small> 男 <small>にお</small> (山形県)
学位の種類	教育学博士
学位記番号	博乙第148号
学位授与年月日	昭和58年7月31日
学位授与の要件	学位規則第5条第2項該当
審査研究科	教育学研究科
学位論文題目	アメリカにおけるヘルバルト主義教授理論の受容と展開
主査	筑波大学教授 長谷川 栄
副査	筑波大学教授 教育学博士 高久 清 吉
副査	筑波大学教授 教育学博士 相川 高 雄
副査	筑波大学助教授 佐々木 俊 介
副査	筑波大学助教授 教育学博士 津 曲 裕 次

論 文 の 要 旨

(1) 本論文の構成

本論文は序章と本論6章と結論の本文、ならびに文献一覧から構成されている。本文は1130頁(400字詰)、文献一覧は8頁より成る。

(2) 本論文の目的と方法

本論文は、アメリカにおけるヘルバルト主義教授理論の受容と展開の過程を解明することを通して、その教授理論史的意義を明らかにすることを目的としている。

先行研究において未解明の、もしくは十分に究明されていない問題点は、①ヘルバルト主義教授理論受容前のアメリカ教授理論の特質、②ヘルバルト主義教授理論の受容の際のそのの変容、③受容後のヘルバルト主義理論の展開、④ヘルバルト主義教授理論のその後のアメリカ教授理論への影響の四つである。これらの問題点は、教授理論を構成する教育目的、教育内容と教材、単元構成、教授過程の主要な柱を視点にして究明される。資料はアメリカやドイツの主題にかかわる歴史的文献に主として依拠し、これらの文献の解釈学的方法に基づいて研究が進められる。

(3) 本論文の概要

第一章「アメリカ・ヘルバルト主義運動の時代的背景」は、1860年頃から1900年頃に至るまでのアメリカの社会的状況、初等教育と教師養成の実状を明らかにすると共に、当時のアメリカの

教授理論の特質（問題点①）を究明している。南北戦争後の産業の発展が学校教育に対して市民性の育成と実用的内容を要求し、新教科が導入され、教材過剰の問題が生じたこと、教師の任務が学校管理に傾き、授業が諸能力の訓練を目標にして「反唱」を中心としたこと、師範学校の教育の実状などから教授理論の体系だったものがみられないこと、などが明らかにされる。

第二章「アメリカ・ヘルバルト主義運動の概要」では、ヘルバルト主義教授理論の受容を究明する準備作業として、ヘルバルト主義運動の発生と展開の過程が明らかにされる。この運動の中心となったイリノイ州立師範大学の特徴とその役割、ヘルバルト主義運動の推進者と支援者たちの活動、その運動の展開の様子——ヘルバルト主義の導入、「ヘルバルト・クラブ」の結成（1892）、「全国ヘルバルト協会」への改組（1895）、その後の運動の状況——などが解明される。

第三章「ドイツ・ヘルバルト主義の教授理論」では、アメリカ・ヘルバルト主義の源流であるドイツ・ヘルバルト主義の特質を確認する作業が進められる。アメリカ・ヘルバルト主義が「ライン主義」とみなされることから、ヘルバルト、ツィラー、ラインの系列の教授理論が明らかにされる。ヘルバルト教授理論の特質の解明では原理的要である教育目的としての道徳性の究明に力点がおかれ、ツィラー理論の解明ではその理論の基本的性格が主として検討される。この検討に基づいて、ラインの教授理論の全体構造の確立と整備とによってその理論の普編性が高められ、世界にそれが普及されるに至ったことを論じている。

第四章「アメリカ・ヘルバルト主義の教授理論」は、ヘルバルト主義教授理論がアメリカに受容される際にどこがどのように変容されたのか（問題点②）を究明している。その結果、教育目的としての道徳性は宗教的側面が後退して「市民性」としてとらえ直されること、ドイツ・ヘルバルト主義の中心統合論は教科の「相互関連」論に傾斜し、文化史段階説がアメリカの歴史に基づく積極的改善へ具体化されたこと、ヘルバルト主義の「方法的单元」の考えは内容面からの検討が強化されて「典形学習」論へ発展したこと、さらに「形式段階」論は「帰納的方法」の観点をいっそう強めたこと、などが示される。そしてそれらの教育目的論から教授過程論に至る諸論点は、当時のアメリカの教育界において十分な教授理論が存在しなかったという状況では、大きなインパクトを与えることになった、としている。

第五章「ヘルバルト主義教授理論の変容と発展」では、受容されたヘルバルト主義教授理論が「全国ヘルバルト協会」の討論などを契機にしてどのように変容し、発展したのか（問題点③）が究明される。論点の第一は、教授目標としてのヘルバルトの興味が本来自然的衝動と区別されていたが、デューイの興味論の影響を受けて本能や衝動と不可分な形で展開されること、第二は「中心統合論」が名実共に教科の「相互関連論」へ展開すること、第三に教授段階論の帰納的方法への傾斜に対して、演繹的方法も重要な役割をになうものとして位置づけられていくこと、第四に「典形学習」論が1910年代のプロジェクト論の影響を受けて、大单元による展開へと進展することが明らかにされる。

第六章「ヘルバルト主義教授理論の影響」は、ヘルバルト主義教授理論がその後のアメリカ教授理論の展開にどんな影響を与えたのか（問題点④）を解明しようとする。この点については、

「進歩主義」の教授理論（パーカー、デューイ）、「本質主義」の教授理論（バーグリー、モリソン）、「折衷主義」の教授理論（チャーターズ）、及び教育心理学に基づく教授理論（ソーンダイク）への影響の様子が明らかにされる。ヘルバルト主義教授理論が、立場を異にする人々やその理論に対してそれぞれの質や程度が違うにしても影響を及ぼした、と詳述される。

最後に「結論」においては、アメリカにおけるヘルバルト主義教授理論の受容を我が国におけるその受容と対比させて、その特質が明らかにされる。そして、アメリカの教授理論の歴史においてヘルバルト主義教授理論の受容のもつ意義は、教育目的、教育内容、単元構成及び教授過程などの論点を明確に提起して定着させて、教授理論の形成の基盤づくりに貢献し、その発展に重要な影響を与えたことにある、と結論づけている。

審 査 の 要 旨

アメリカにおけるヘルバルト主義教授理論の受容とその影響の研究は、従来進歩主義教授理論の研究に注目するあまり、比較的部分的面に向けられ、その数も乏しい状況である。我が国の研究でも部分的な解明はみられるにしても、真正面から取り組んだ研究はないといってよい状況にある。

本研究は、そうした研究状況の中で、ヘルバルト主義教授理論のアメリカへの受容と展開の問題を真正面にすえて、その全貌の解明に取り組んだものである。豊富な資料に当たりながら、適切な検討を加え、ヘルバルト主義教授理論がアメリカの教授理論構成の根幹づくりに寄与を果したということを立証した意義は、大きい。

とくに、乏しいながらも存在する先行研究の問題点を明確にし、その克服を図ろうとし、その目的を達成している。ヘルバルト主義教授理論の受容以前の状況を考察し、その受容の際のアメリカ的理論の変容を指摘し、受容後のその理論の展開の様子をきわめて詳細にたどり、さらにその理論のその後の教授理論への影響を究明したことは、本研究の高く評価されるべき業績である。それは、アメリカ教授理論史の研究をさらにいっそう前進させる大きな意義をもっている。

本研究は、研究の視角と資料からみて教授理論の分野に限定されていて、広大なアメリカの教育及び教授の実践的活動の分野にまで十分眼が向けられていない。受容されたヘルバルト主義教授理論の教育実践への具体的な浸透の状況とその特質については、今後の研究に期待しなければならない。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。